

よく読むとは？

私は、よく「国語ができるようになるにはどうすればよいのですか？」という質問を受けます。
この質問は「……をすればよい」というお手軽な情報があり、それを問うているものと思われます。
まさか、私が1年をかけてする百数十時間の授業の内容のすべてについて問うていたわけではないでしょうから。
しかし、「……をすればよい」という情報を得ることで、国語ができるようになるのならば、みんなもっと国語ができてよいはずなのに、なぜ多くの受験生が国語に苦しむのでしょうか。現代は情報の時代であり、また、快適さと便利さが求められる時代ですから、「手っ取り早く」「わかりやすく」「ストレスなく」スマホ片手に国語ができるようになる方法が求められるのですが、残念ながらそんな簡単なものではないと、昭和の生まれなのに明治生まれのような頑固じじい（一種の化石？）になりつつある私は言わざるを得ないのです。

そこで、私の方から、あなたに質問する形で国語の勉強方法について考えてみたいと思います。

私からの質問 1

文章の読解に際し、塾の先生は「傍線部の前後を**よく読みなさい**」などと言います。
しかし、あなた方は本当に「**よく読んでいる**」のでしょうか。

「よく読む」とは、文の字面を見ることではありません。
文の字面は、皆さんが通学途中に目にする景色のように皆さんの目に映っています。
むしろ、映っては消えていきます。
これは「よく読む」ということとは違います。

「よく読む」とは、その文の意味をはっきりととらえることだからです。
これは、その字面が何を意味しているのかを、脳で処理し、はっきりと認識することです。
たとえば、通学途中の道路の電柱にベンツが衝突していれば、あなた方は「事故だ」とはっきりと認識します。
意味をとらえるのはこれと似ています。ある具体的な出来事を「事故」として抽象概念でとらえることです。

ただし、読解の場合には、逆に、「事故」という抽象概念を具体化してとらえるということの方が多いのです。
抽象的概念は、具体的なイメージが伴わないと理解できません。

「事故」の場合には、ニュースなどで毎日のように具体例が取り上げられますから、誰でも具体的にイメージしやすいのですが、「近代社会」とか、「刑事司法の在り方」とか、国の「財政収支」とか、…なってくると、今一つ具体的にイメージしにくい人が多くなると思います。
たとえば、「近代社会は…」と言われても「近代社会が生まれるまでの歴史やその後の歴史」「近代社会の仕組み」「他の時代と異なる近代社会の特色」「近代社会のものの考え方」などを学んでないと、何もイメージできません。

さらに、読解では、文と文との間の論理的関係の認識も重要です。
これも、脳による処理が必要です。ただ字面を追っても論理は把握できません。
読みながら、文章を分解し、論理的に並べていくことです。
いわば、論理をつくりあげている判断をそれぞれ把握し→（やじるし）で並べ図式化することです。

たとえば、
人間が化石燃料を大量に消費する→（やじるし）大気中の二酸化炭素が増加する。

森林破壊が急速に進んでいる→（やじるし）植物による二酸化炭素の吸収が減る→大気中の二酸化炭素が増加する。

この二つにより→（やじるし）温室効果が進む→（やじるし）温暖化が進む

今から三十年ほど前に、国語の教科書に「さよならの学校」という作品が載っていました。その終わりの方を引用させていただくと、次の①②ような文がありました。

①「おじいちゃんは長いことせいいっぱい生きて亡くなった。人はだれも死ぬ、一生は一度きり、だから自分もけんめいに生きよう一と、恭はあのと看度も心の中できり返していた。」

②「あの木は、生きる意味みたいなものを教えてくれたおじいちゃんのさよならの学校のように、いまの恭は考えるようになっていた……。」

そこで問題です。

問1「生きる意味みたいなもの」とは何でしょうか？

「一生は一度きり、だから自分もけんめいに生きよう一と、恭はあのと看度も心の中できり返していた。」とあります。この文は「一生は一度きり、（だから、けんめいに生きることが大切だ。）だから自分もけんめいに生きよう一と、恭はあのと看度も心の中できり返していた。」というように（だから、けんめいに生きることが大切だ。）という文を補って読むことができます。この価値判断が「生きる意味みたいなもの」であり、恭の決心の前提として導かれるものです。これが論理的に読むということの一つの例です。

問2「さよならの学校」とは何を例えたものでしょうか？

この質問に対して、「さよならの学校」って何だろうな？なんだろうな？…と、パソコンの起動画面のように頭の中でくるくるとこの言葉を回してはいけません。「さよなら」と「学校」に分解し、それぞれ何を意味するのか、文章に返って考えます（文章から意味を探します）。「おじいちゃんのさよなら」これは文章中ではおじいちゃんの死を意味します。「学校」とは「生きる意味みたいなものを教えてくれた」ことです。学校は教えるところですから。

すると「さよならの学校」とは、「恭が、おじいちゃんの死を通して、一生は一度きりだから、けんめいに生きることが大切だという生きる意味みたいなものを教えられたこと」というようにまとめられるでしょう。

これも論理的な読解の一例です。記述問題の答えは、直感的に天から降ってくるようなことを書くことではありません。文章内容を論理的に把握してまとめるということです。

ところで、問題は、この論理的に読むというトレーニングをどのようにしてするのかということです。

まず、文章に密着して読むための問題を作らなければなりません。

それは、入試問題などとは異なるものでなければなりません。入試問題を解くための前提として、その文章の内容をしっかりと把握するための問題を作らなければなりません。この問題を生徒に解かせることで、文章に密着し論理的に読むためのトレーニングをします。

次に、文章を読解することと並行して知識や考え方を生徒に習得させることも必要です。先ほどの「近代社会と

は」ということを理解するためには、「近代社会」について書かれた様々な文章を読ませ、そこから知識や考え方を習得させなければなりません。しかし、まだ小学生で勉強期間の少ない（しかも勉強にかけられる時間も少ない）中学受験生にとっては、このようなことは容易なことではありません。そこで、少なくとも、生徒が会う文章からはすべてを吸収させるという勉強をするのがよいと思います。部分的な知識もいくつか積み重なれば、全体像が見えてきます。

さらに、このようなトレーニングをくり返させることが必要です。昔から「国語は一回やれば答えがわかっているから、繰り返しやる必要はない」などということが言われ、そのように信じられている感があります。では、私が今教えた記述問題の答え生徒にやり直させると、正確に再現できる生徒はほとんどいないのはなぜでしょうか。一回答えを知ったくらいで、それで分かったといえるほど、読解や記述は簡単ではないということでしょう。したがって、繰り返しのトレーニングが必要なのです。一般に言われていることをそのままのみにするのは問題ですね。疑問を持つことや、自分の頭で考えるということをしなないのでから。

ちなみに、「読解力をつけるためには、本を読むのがよい」というようなことも昔から言われています。もちろん、上に述べたような分析と論理的把握の仕方では本を読むなら、読解力を鍛える効果がありますが、朝ドラか何かを見るようにただ漫然と読んでもそのような効果は期待できないでしょう。むしろ最近の中学入試問題のような難しい文章に真剣に分析的に取り組み、そこから知識や考え方を学ぶ方が、後に本をしっかりと読むための基礎を作ることになるでしょう。もちろん、これは読解力をつけるための読書の方法について述べただけのことであり、楽しみの読書を否定するものではありません。